

# 法華經提婆達多品「變成男子」の菩薩觀

白 景 皓

## 1. はじめに

『法華經』(*Saddharmapundarikasūtra*)は初期大乘經典の一つであり、「諸經の王」と言われる。如來は一仏乘を巧みな方便としての「三乘」(聲聞乘、獨覺乘、菩薩乘)をもって教示するという一乘思想を説く。

『法華經』サンスクリット原典の第二十章「如來神力品」以前の部分は古層に属するのに対して、残りの七章と「提婆達多品」<sup>1)</sup>は新層に属すると通説される。サンスクリット原典では「提婆達多品」相当部は第十一章「見宝塔品」の後分に当たり、<sup>2)</sup>獨立の章ではない。

「提婆達多品」は悪人(提婆達多)や女人の濟度の思想を説いたものとして知られている。この章は二つの物語からなる。前半は「悪人成仏」の物語であり、後半は「變成男子・龍女成仏」の物語である。

本稿は、これらの「提婆達多品」を構成する二つの物語のうちの「變成男子・龍女成仏」物語に焦点を当て、同物語の従來の解釈を検討すると同時に「變成男子」の新たな解釈を提案し、もって『法華經』の菩薩觀を論ずるものである。

## 2. 「變成男子」の従來の解釈

「變成男子」について、当該サンスクリット原典に基づく新たな解釈を下す前に、その基幹部の漢訳、<sup>3)</sup>漢訳の諸注釈、チベット語訳、原典からの現代語訳を提示し、「變成男子」解釈の問題点を指摘する。

## 2.1. 漢訳から見る「变成男子」の解釈

法意訳<sup>4)</sup>『妙法蓮華經』「提婆達多品」、竺法護訳『正法華經』、失訳『薩曇分陀利經』の「变成男子」基幹部の解釈は以下の通りである。

- ・『妙法蓮華經』：当時の衆会、皆龍女の、忽然の間に變じて男子と成りて、菩薩の行を具せることを見る<sup>5)</sup>。
- ・『正法華經』：斯に於いて、男子の菩薩と變じて成り<sup>6)</sup>。
- ・『薩曇分陀利經』：是に於いて、即時に女身變じて菩薩と為り、衆会皆驚かし<sup>7)</sup>。

『妙法蓮華經』「提婆達多品」の訳者法意は「法華衆会は龍女が突然に男子に変わって菩薩行を具えることを見る」と解釈し、龍女が女子のままに菩薩行を具えることを排除する。また、『正法華經』の訳者竺法護は「ここにおいて龍女が男子菩薩となった」と解釈し、菩薩が男子たることを強調する。一方、『薩曇分陀利經』の訳者は「ここにおいて、突然に女身は菩薩となった。法華衆会はみな驚いた」と解釈し、女子が速やかに菩薩となったのは法華衆会にとって予期せぬ出来事であることを強調する。

## 2.2. 『妙法蓮華經』注釈書から見る「变成男子」の解釈

吉蔵撰『法華義疏』、智顛説『妙法蓮華經文句』、基撰『妙法蓮華經玄贊』、最澄撰『法華秀句』がどのように『妙法蓮華經』「变成男子」を解釈しているのかを見ることも『法華經』の「变成男子」思想を考察する上で有益である。

- ・『法華義疏』：亦た男にして、亦た女なり。則ち龍女、是れなり。本、是れ女なり。變じて男と為す<sup>8)</sup>。

法華經提婆達多品「变成男子」の菩薩觀（白）

- ・『妙法蓮華經文句』：南方の縁熟し、宜べ八相を以て成道すべし。此の土の縁薄く、祇だ龍女を以て教化せり。此れ是れ権巧の力なり。<sup>9)</sup>
- ・『妙法蓮華經玄贊』：經に『当時衆会』より『演說妙法』に至る。贊に曰わく、道成ずることを示現する二有り。一は、因を見せしむ。二は、果を見せしむ。<sup>10)</sup>
- ・『法華秀句』：当に知るべし。龍女、身密を開して速やかに成仏することを示す事、法華經の勢い、十方の衆生を化することを顕す。<sup>11)</sup>

吉藏は『妙法蓮華經』における「变成男子」という表現のみに注目し、「龍女は男子でありかつ女子であり、変化前が女子、変化後が男子である」というように、龍女は、男女両性を具えるので、男子に変わり得ると解する。

智顛は『妙法蓮華經』「变成男子・龍女成仏」物語の構造に注目し、「南方世界において、衆生達が龍女が菩薩であることを受け入れる縁はすでに成熟しているので、龍女は〈成仏の姿〉を示現する。その一方、この世において、衆生達が龍女が菩薩であることを受け入れる縁は薄い、すなわち未だ成熟していないので、龍女は〈龍女の姿〉を通じて教化する」と解釈し、龍女の〈成仏の姿〉及び〈龍女の姿〉の示現は巧みな方便（権巧）であるとする。

基もまた同物語の構造に注目し、「龍女は成仏の因と成仏の果を見せる」と解釈し、龍女はこの世において成仏の因である菩薩行を具える〈菩薩の姿〉を見せ、南方世界において成仏の果である〈仏の姿〉を見せるとする。

最澄は『妙法蓮華經』における「忽然之間變成男子。具菩薩行」という表現に注目し、「龍女が身体の不思議さ（身密）、すなわち突然に男子に変わったことを開顕し、速やかに成仏すること、すなわち菩薩行を具えることを示現することは『法華經』の威力（勢）を顕し、『法華經』はあらゆる

衆生達を教化する」と解釈し、「變成男子」物語の創作意図は『法華經』の威力を顕し、あらゆる衆生を教化することであるとする。

### 2.3. チベット訳から見る「變成男子」の解釈

「變成男子」該当部のチベット語訳は以下の通りである。

さて、そのとき、すべての世間の人々及び長老舎利弗の眼前で、サーガラ龍王の娘は、女根が隠れて男根が現れたのち、自分が菩薩であることを示現する。<sup>12)</sup>

チベット訳は、龍女は、女根が隠れて男根が現れたのち、自分が菩薩であることを示現すると解釈する。チベット訳の解釈によると、「變成男子」は龍女の示現ではない。

### 2.4. 現代語訳から見る「變成男子」の解釈

以下に「變成男子」サンスクリット原典からの現代語訳を挙げる。

- ・ Kern (1884, 253) : At the same instant, before the sight of the whole world and of the senior priest Sāriputra, the female sex of the daughter of Sāgara, the Nāga-king, disappeared; the male sex appeared and she manifested herself as a Bodhisattva.
- ・ 岩本 (1964, 225) : そのとき、サーガラ竜王の娘は、世間のすべての人々が見ているところで、また長老シャーリ＝プトラの眼前で、彼女の女性の性器が消えて男子の性器が生じ、みずから求法者となったことを示した。
- ・ 松濤 (1976, 51) : それから、そのとき、サーガラ龍王の娘は、すべて

の世間の人々の環視するなかで、シャーリプトラ長老の見ている面前で、その女性の器官が消滅し、男性の器官が出現して、自分が菩薩であることをあらわして見せ

- ・望月（1998, 6）：サーガラ龍王の娘は一切世間の面前で、長老舍利弗の面前で、彼女の女根を消滅させ、男根を出現させ、菩薩となった自我をあらわした。<sup>13)</sup>
- ・植木（2008, 32）：すると、その時、一切世間の人々の眼の前において、また長老シャーリプトラの眼の前で、その女性の性器が消えてなくなり、男性の性器が現われ、サーガラ龍王の娘は、自ら真の菩薩であることをはっきりと示した。
- ・戸田（2013, 150）：さて、その時、海龍王の息女は、一切の世人の眼前で、しかも長老舍利弗の眼前で、その女性器官を内蔵せられ、そして男性器官を現出せられ、そして菩薩〔の姿〕に成った我が身を〔衆目にさらして〕見せる。

Kern 以下戸田まで示現内容は菩薩たることである。そして注目すべきは、「女という性」(female sex) と「男という性」(male sex) の対比を描く Kern を除けば、すべての研究者が「女根」(女性器) と「男根」(男性器) の対比を描いている点である。

### 3. 「変成男子」サンスクリット原典

以下に「変成男子」サンスクリット原典を Kern/Nanjio 本に従って提示する。戸田本との異同はない。

さて、そのとき、サーガラ龍王の娘は、世間のすべての人々の眼前で、及び長老舍利弗の眼前で、その〈女根〉(strīndriya) が隠れて〈男根〉

法華經提婆達多品「变成男子」の菩薩觀（白）

（puruṣendriya）が現れたことを示現し（saṃdarśayati）、そして、菩薩である自分自身を示現する（saṃdarśayati）<sup>14)</sup>。

使役動詞 saṃdarśi (saṃ√dṛś-ṆiC、「示現する」) が用いられている。当然、龍女の眼前にいる者たちは、〈女根〉(strīndriya) が隠れて〈男根〉(puruṣendriya) が現れることを見ており (saṃ√dṛś)、菩薩である龍女を見ている (saṃ√dṛś)。したがって、龍女の側からは、それらを彼らに「見せている」(saṃdarśi) ことになる。

ここで注目すべきは、使役動詞 saṃdarśi の名詞形 saṃdarśana の『法華經』における用例である。『法華經』「妙音菩薩品」の用例を上げよう。

…あるところでは長者の妻の姿 (rūpa) を通じて、あるところでは市民の妻の姿を通じて、あるところでは少年の姿を通じて、あるところでは少女の姿を通じて、妙音菩薩大士は、この『白蓮のような正法』という経説を説いた。これだけの姿の示現 (rūpasamdarśana) を通じて、妙音菩薩大士は、この『白蓮のような正法』という経説を衆生達のために説いた。<sup>15)</sup>

示現 (saṃdarśana) されるものが〈姿〉(rūpa) であることに注目しなければならない。そして〈姿〉は目に見えるものである。ここにおける「姿」の使用法は『法華經』「觀世音菩薩普門品」における「姿」の用例に通じるものである。

〔觀自在菩薩大士は〕どのように衆生達のために教えを教示するのか。そして、觀自在菩薩大士の巧みな方便の領域はいかなるものなのか。」このように言った時、世尊は無尽意菩薩大士に次のように言った。「良

家の息子よ、世間界があれば、そこにおいて、觀自在菩薩大士は仏の姿 (buddharūpa) を通じて衆生達のために教えを教示する。觀自在菩薩大士は菩薩の姿 (bodhisattvarūpa) を通じて衆生達のために教えを教示する。…<sup>16)</sup>」

このように『法華經』では、「長者の妻の姿」、「市民の妻の姿」、「少年の姿」、「仏の姿」、「菩薩の姿」という〈姿〉の概念が成立する。文脈から明らかかなように、これらの〈姿〉はあくまでも〈見せかけ〉である。そしてこのような〈見せかけ〉としての〈姿〉の〈示現〉という考えを考慮するならば、龍女が示現するものもまた〈見せかけ〉としての〈姿〉であることが予想される。

#### 4. 「變成男子」の示現の構造

すでに見たように、サンスクリット原典に基づけば、龍女の示現内容は、〈女根〉の隠滅と〈男根〉の顕現、菩薩たることである。

それでは、示現される隠滅する〈女根〉・顕現する〈男根〉とは何であろうか。女性器や男性器が〈姿〉たりえないことは自明である。ここで『俱舍論』「根品」の記述に基づき、〈女根〉・〈男根〉の概念を分析し、「變成男子」の示現の構造を明らかにしよう。

[問] しかし、〈indriya〉(根) [という語] の意味は何か。[答] [〈indriya〉という語は]「最高の支配となる」(paramaiśvarya) という意味で使用される動詞語根の id (=√ind)、その派生形であり、「Xに対して支配力を及ぼす、Xを司るもの」を意味する。このゆえに、〈indriya〉(根) [という語] の意味は「司る力」(ādhipatya) という意味である。<sup>17)</sup>

女根・男根・命根・意根は二つのものをそれぞれに司る力を持つ。まずもって、女根（strīndriya）と男根（puruṣendriya）は衆生の区別（bheda）と差異（vikalpa）を〔司る力を持つ〕。そのうち、衆生の区別は、女性、男性〔という区別〕である。衆生の差異は胸などの形や音声や振舞いの違いである<sup>18)</sup>。

〔女根と男根は〕女性性と男性性（strīpumstva）を司る力を持つから（ādhipatyāt）。そして、身〔根〕から女根と男根〔が異なるものとして立てられる〕<sup>19)</sup>。

〔女根と男根は〕女性性（strītvā）と男性性（pumstva）を司る力を持つから（ādhipatyāt）。そして、身〔根〕から女根と男根〔が異なるものとして立てられる〕<sup>20)</sup>。

まさに女根と男根は、身根から異なるものとして立てられるが〔身根とは〕別個なものとしてあるのではない。その身根のある部分、すなわち、性器（upastha）という部分、それが「女根」と「男根」という名称を得る。〔女根と男根は〕それぞれ順次に女性性と男性性を司る力を持つからである。そのうち、女性性（strībhāva）とは、女性の姿形（ākṛti）や音声や身振りや志向である。実にこれが女性を女性たらしめる女性性である。男性性（pumbhāva）とは、男性の姿形や音声や身振りや志向である。実にこれが男性を男性たらしめる男性性である。<sup>21)</sup>

『俱舍論』によれば、〈女根〉・〈男根〉は、第一義的には、女性の姿形などの女性性を司る力（strītvā-ādhipatyā）、男性の姿形などの男性性を司る力（pumstva-ādhipatyā）であり、第二義的にはそれらの力の発現である身体的特徴としての女性器・男性器という性器（upastha）を指す。ここで注目すべきは、女性性を司る力、男性性を司る力の発現のひとつが女性の姿形（stryākṛti）、男性の姿形（puruṣākṛti）である点である。龍女の眼前にい



る者たちが見ているものは、まさに女性の姿形、男性の姿形でなければならない。一般に力そのものは不可視であり、性器が露出されることは想像だにできない。

かくしてこのように龍女の示現するものは、〈女性の姿〉の消失と〈男性の姿〉の顕現、あるいは、〈男性の姿〉そのものと〈菩薩の姿〉である。これが「变成男子」の示現の構造である。

## 5. 「变成男子」物語の創作意図

次に、「变成男子」物語を創作するにあたって『法華經』の作者達が意識せざるをえなかった伝統的に確立されていた仏教の女性観と性の観点からの菩薩觀がいかなるものであったのかを見てみよう。

まず、『法華經』成立以前の初期仏教の女性観について初期經典『中部・多界經』の以下の一節を挙げる。

『女性が阿羅漢である正自覚者になるであろうということは道理でなく、機会のないものである。この道理は存在しない』と知ります。また、『男性が阿羅漢である正自覚者になるであるということは道理である。この道理は存在する』と知ります。『女性が轉輪王…』と知ります。『女性がサッカ…』と知ります。『女性が魔…』と知ります。『女性が梵天…』と知ります。<sup>22)</sup>

初期仏教の女性観によれば、女性は阿羅漢である正自覚者・轉輪王・帝釈・魔・梵天といった五つの位を獲得する機会を得ないものである（女人五障）。女性は貪欲が強いことがその理由とされる。

また、部派仏教は、菩薩たる資格について次のように述べる。

法華經提婆達多品「变成男子」の菩薩觀（白）

〔問〕何時から菩薩であるか。〔答〕〔次のような〕特徴をもたらす行為（業）をなしてからである。善趣にいる者であり（sugatiḥ）、良家に生まれる者であり、感官が完備している者であり、男子であり（pumān）、〔前〕生を憶念する者であり、不退転者である（anivṛt）。<sup>23)</sup>

部派仏教は、菩薩たる資格として以下の6項目を挙げる。

- (1) 神や人間という善趣にあるもの
- (2) クシャトリヤやバラモン等の良い家系に生まれたもの
- (3) 感官が完備しているもの
- (4) 男性であるもの
- (5) 前世を憶念するもの
- (6) 悟りをめざして退転しないもの

菩薩たる資格として男性であることが挙げられている。このことは、部派仏教においては、女性は菩薩たりえないことを示す。

『法華經』の作者達は、上述のような初期仏教の女性觀及び部派仏教の菩薩觀を踏まえ、長老舍利弗に仮託して、以下のような「長老舍利弗の疑念」を創作した。

今にいたるまでも、女子は五つの位を獲得していない。五つとは何か。第一は梵天の位。第二は帝釈の位。第三は天王の位。第四は轉輪聖王の位。第五は不退転の菩薩の位である。<sup>24)</sup>

注目すべきは、初期仏教の「女人五障」の阿羅漢である正自覚者（arahaṃ assa sammāsambuddho）の代わりに、「不退転の菩薩の位」（avaivartikabodhisattvasthāna）が挙げられていることである。女性は不

退転の菩薩とはなりえないのではないか、これが長老舍利弗の疑念の核心である。これによって、「變成男子」物語の八歳龍女の登場との連関が見えてくる。

ところで、「八歳龍女」の設定にはどのような意図があるのであろうか。『俱舍論』に次のような記述がある。

畜生の最長の寿命は一中劫である。またさらに、それは難陀と跋難陀と阿輸多利などの諸龍の〔寿命〕である。<sup>25)</sup>

龍は悪趣の畜生であるが、一中劫の寿命を具えるので、龍の八歳は人間の八歳と比較すれば、極めて年少であることが知られる。愚者（bala）が含意されていると考えられる。こうして『法華經』の作者達が創作した「八歳龍女」は、伝統的な仏教の観点から見れば、畜生という悪趣に生まれた愚者であり、かつ女子の典型例である。このような「八歳龍女」が、「變成男子」物語においては、〈女性の姿〉を隠し、〈男性の姿〉を示現する。この示現が、「八歳龍女」が菩薩たることの証明としてなされていることに注目すべきである。部派仏教の菩薩觀に見られる「菩薩は男子でなければならない」という女性排除の思想を批判し、菩薩たることに性は関係しないことを主張しようとする意図が伺える。

## 6. 『法華經』の菩薩觀

『法華經』の作者達は、部派仏教の菩薩觀を批判した上で、龍女に仮託して、龍女の〈女性の姿〉の消失、〈男性の姿〉の顯現及び〈菩薩である自分自身の姿〉の示現を通じて『法華經』の菩薩觀を説く。

### 6.1 龍女の示現から見る大乘仏教の菩薩觀

龍女が〈女性の姿〉の消失と〈男性の姿〉の顯現を示現し、そして、〈菩薩である自分自身〉を示現する。それでは、龍女の眼前にいる者たちは、そこに菩薩のいかなる姿を見るのであろうか。

文殊師利〔菩薩〕が次のように答えた。「良家の子よ、〔確かに〕いるのです。サーガラ竜王の娘です。〔彼女は〕八歳ですが、生まれながらに、最高の知恵を持ち、鋭敏な感官の力を具え、智に導かれた身体的、口語的、精神的な行為を具え、あらゆる如來の説かれた音節と意味を理解するための保持能力を獲得しており、一刹那にあらゆる法と衆生に対する幾千もの精神集中をすでに獲得しました。〔彼女は〕菩提心から退転するような性向を持つ者ではなく、広大なる領域に及ぶ誓願を有し、あらゆる衆生に対して自分自身に対すると同じような愛情を懐き、さらに、〔大乘の〕美質を發揮する能力をそなえ、それら（美質）を欠くことはなかった。笑顔を浮かべ、蓮のような最高の美しい顔色をそなえ、慈しみの心を備えるものであり、慈愛の言葉を語る。彼女は無上正等覚を自覚する能力を持っている。<sup>26)</sup>」

龍女の眼前にいる者たちは、そこに「笑顔を浮かべ、蓮のような最高の美しい顔色をそなえた」存在を見る。これが菩薩の姿である。この姿は龍女がまさしく菩薩たる資格を有していること、内なる菩薩性に裏打ちされていることをここに示している。龍女は菩提心から退転する性向がなく、衆生濟度の誓願を有し、無上正等覚を自覚する能力を有している。

### 6.2 龍女の示現から見る『法華經』の一乗菩薩觀

「變成男子」物語における龍女の〈女性の姿〉の隱匿、〈男性の姿〉の顯

示、〈菩薩である自分自身の姿〉の示現という順序には、すでに述べたように、菩薩たることは性と関係しないという明確な意図が込められている。次の「法師品」の記述は、性が菩薩たることを条件付けないことを明確に主張するものである。

「薬王よ、この集会のなかに、多くの神々、龍、ヤクシャ、ガンダルヴァ、アスラ、ガルダ、キンナラ、マホーラガ、人間や人間以外のものたち、また、比丘、比丘尼、信男、信女たち、声聞乗に属するもの、独覚乗に属するもの、菩薩に属するものたちがいて、如来から直接この法門（『法華經』）を聞いているのであるが、それらのものをお前は見ているか。」〔薬王菩薩は〕お答えした。「世尊よ、見えています。善逝よ、見えています。」世尊は仰せになった。「薬王よ、彼らはみな菩薩大士であり、この集会においてわずか一詩頌でも一詩句でも聞くならば、あるいはまた、わずか一度でも〔菩提〕心を起こし、この經典を随喜するならば、薬王よ、これらの四衆はみな、無上正等覚を自覚するであらう、と私は予言するのである。<sup>27)</sup>」

『法華經』の聴聞者、随喜者はおよそ誰であれ菩薩（大士）である。この場合の「菩薩」は菩薩乗の菩薩のみならず、二乗（声聞・独覚）の修行者と四衆弟子と一切の人間と神々も含まれる。この「菩薩」は三乗の区別を超え、『法華經』に基づいて、無上正等覚を自覚するであろう菩薩である。菩薩乗の菩薩と区別すると、「一乗菩薩（三乗の区別を超越した菩薩）」と言い得る。そして重要なのは、龍女はまさしく『法華經』を崇め尊ぶ衆生であることである。龍女は一乗菩薩に他ならない。

智積〔菩薩〕が次のように言った。「この經典は甚深で微妙で、理解す

法華經提婆達多品「变成男子」の菩薩觀（白）

るのが困難であり、しかも他のどんな經典もこの經典に匹敵すること  
がありません。無上正等覺を覚るために、無上正等覺を自覺するた  
めに、この宝のような經典を崇め尊ぶであろう衆生は誰かいる。」文殊師  
利〔菩薩〕が次のように答えた。「良家の子よ、〔確かに〕いるのです。  
サーガラ竜王の娘です。…」<sup>28)</sup>

『法華經』作者達は『法華經』を崇め尊ぶ衆生である龍女を創作し、「法  
華經を崇める者はおよそ誰であれ菩薩である」という『法華經』の菩薩觀  
を従来の伝統仏教に宣言していることが知られる。

## 7. 結 論

『俱舍論』によれば、〈女根〉・〈男根〉は、衆生の区別（sattvabheda）・衆  
生の差異（sattvavikalpa）を支配する力であり、女性の〈姿〉・男性の〈姿〉  
の根拠であった。「变成男子」は、物語としては、龍女が菩薩たることをそ  
れを疑う者たちに「証明」するための装置、すなわち巧みな方便として設  
定されていることは明らかである。

『法華經』の作者達にとって、彼らの一乗思想は、もはや衆生の差別化を  
前提するものではありえない。菩提心を起こし『法華經』を崇め尊ぶ衆生  
ならば、それがどのような〈姿〉をとるものであれ、彼らはすべて「菩薩」  
である。『法華經』の作者達は、一乗思想に基づく一乗菩薩觀をもって「变  
成男子」物語を創作したのである。

注

- 1) 「提婆達多品」という名は現行の漢訳『妙法蓮華經』「提婆達多品第十二」に従う。
- 2) 平川（1983, 8）参照。
- 3) 当該サンスクリット原典基幹部は第3節に提示している。
- 4) 『妙法蓮華經提婆達多品第十二』の訳者は法意である。『古今訳経図紀』（靖邁撰）卷

法華經提婆達多品「变成男子」の菩薩觀（白）

第四 T55, 363b25-29: 沙門達摩摩提。此云法意。西域人。…以齊武帝永明八年歲次辛未。爲沙門法獻於楊都瓦官寺。譯觀世音懺悔除罪呪經（一卷）。妙法蓮華經提婆達多品第十三（T55, 363n6：三＝二 三）（一卷）。

沙門達摩摩提、此れ「法意」と云う。西域人なり。…齊武帝永明八年歳の次いで辛未に、沙門法獻の爲に、楊都瓦官寺に於いて、『觀世音懺悔除罪呪經』一卷、『妙法蓮華經提婆達多品第十二』一卷を訳す。

- 5) 『妙法蓮華經』「提婆達多品」（法意識）卷第四 T9, 35c16-26: 當時衆會皆見龍女。忽然之間變成男子。具菩薩行。  
書き下しは鳥地（1914, 346）による。
- 6) 『正法華經』（竺法護訳）卷第六 T9, 106a20-25: 於斯變成男子菩薩。
- 7) 『薩曇分陀利經』（失訳）一卷 T9, 198a4-9: 於是即時女身變爲菩薩衆會皆驚。
- 8) 『法華義疏』（吉蔵撰）卷第九 T34, 592b26-27: 亦男亦女。則龍女是也。本是女變爲男。
- 9) 『妙法蓮華經文句』（智顛説）卷第八下 T34, 117a24-27: 南方緣熟宜以八相成道。此土緣薄祇以龍女教化。此是權巧之力。
- 10) 『妙法蓮華經女贊』（基撰）卷第九本 T34, 817a22-23: 經當時衆會至演説妙法 贊曰。示現道成有二。一見因二見果。
- 11) 『法華秀句』（最澄撰）卷下『伝全』3, 264: 當知。龍女開身密。示速成佛事。顯法華經之勢。化十方衆生。
- 12) D 100b1-7; P 115a1-115b2; S 147b3-148a5: de nas de'i tshe 'jig rten thams cad dang gnas brtan shā ri'i bu'i mngon sum du klu'i rgyal po rgya mtsho'i bu mo bud med kyi dbang po mi snang bar gyur te | skyes pa'i dbang po byung nas | bdag nyid byang chub sems dpar gyur bar yang dag par bstan te | (yang dag bar bstan, \*saṃdarśayati).
- 13) 望月（1998, 6）は、この訳の提示の後「变成男子というのは、表面的な姿・形の変化ではなくて、女根を男根に転ずるという男女の性の根本的な変身を意味していることになる」と解釈する。氏の解釈は筆者の理解の対極にあるものであることを指摘しておく。
- 14) SP 265.4-6: atha tasyāṃ velāyāṃ sāgaranāgarājadhūtā sarvalokapratyakṣaṃ sthāviraśya ca śāriputraśya pratyakṣaṃ tat strindriyam antarhitam puruṣendriyaṃ ca prādurbhūtaṃ bodhisattvabhūtaṃ cātmanāṃ saṃdarśayati |
- 15) SP 433.6-9: ... kvacid gṛhapatibhāryārūpeṇa, kvacin naigamabhāryārūpeṇa, kvacid dāraakarūpeṇa, kvacid dārikārūpeṇa, gadgadasvaro bodhisattvo mahāsattvaḥ imaṃ saddharmapuṇḍarikaṃ dharmaparyāyaṃ sattvānāṃ deśayati sma | iyadbhiḥ kulaputra rūpasamdarśanair gadgadasvaro bodhisattvo mahāsattva imaṃ saddharmapuṇḍarikaṃ dharmaparyāyaṃ sattvānāṃ deśayati sma |
- 16) SP 450.11-16: kathaṃ sattvānāṃ dharmāṃ deśayati | kiḍṛśaś cāvalokiteśvaraśya

- bodhisattvasya mahāsattvasyopāyakaśalyaviṣayaḥ | evam ukte bhagavān  
akṣayamatiṃ bodhisattvaṃ mahāsattvaṃ etad avocat | santi kulaputra  
lokadhātavaḥ yeṣv avalokiteśvaro bodhisattvo mahāsattvo buddharūpeṇa  
sattvānām dharmaṃ deśayati | santi lokadhātavaḥ yeṣv avalokiteśvaro bodhisattvo  
mahāsattvo bodhisattvarūpeṇa sattvānām dharmaṃ deśayati |
- 17) AKBh on AK 2.1ab: kaḥ punar indriyārthaḥ | idI paramaiśvare | tasya indantiti  
indriyāni | ata ādhipatyārtha indriyārthaḥ |
- 18) AKBh on AK 2.1bc: strīpuruṣajīvitamanaindriyāṇāṃ dvayor arthayoḥ pratyekam  
ādhipatyam | strīpuruṣendriyayoḥ tāvat sattvabhedavikalpayoḥ | tatra  
sattvabhedāḥ strī puruṣa iti | sattvavikalpaḥ stanādisamsthānasvarācārānyathāt  
vam |
- 19) AK 2.2cd: strītvapuṃstvādhipatyāt tu kāyāt strīpuruṣendriye ||
- 20) AKBh on AK 2.2cd: kāyendriyād eva strīpuruṣendriye pṛthak vyavasthāpyete  
nārthāntarabhūte | kaścid asau kāyendriyabhāga upasthapradeśo yaḥ  
strīpuruṣendriyākhyāṃ pratilabhate |
- 21) AKBh on AK 2.2cd: yathākramaṃ strīpuṃstvayor ādhipatyāt | tatra sribhāvaḥ  
stryākṛtisvaraceṣṭābhīprāyāḥ | etad dhi striyā strītvam | puṃbhāvaḥ  
puruṣākṛtisvaraceṣṭābhīprāyāḥ | etad dhi puṃsaḥ puṃstvam |
- 22) MN 115 (Bahudhātukasutta) [PTS 65.24-66.9]: Aṭṭhānam etaṃ anavakāso yaṃ  
itthī araham̐ assa sammāsambuddho, n' etaṃ ṭhānaṃ vijjati 'ti pajānāti. ṭhānaṃ ca  
kho etaṃ vijjati yaṃ puriso araham̐ assa sammāsambuddho, ṭhānam etaṃ vijjatīti  
pajānāti; Aṭṭhānam etaṃ anavakāso yaṃ itthī rājā assa cakkavattī, n' etaṃ ṭhānaṃ  
vijjati 'ti pajānāti. ṭhānaṃ ca kho etaṃ vijjati yaṃ puriso rājā assa cakkavattī,  
ṭhānametaṃ vijjati 'ti pajānāti; ... itthī sakkattaṃ kareyya, ... 'ti pajānāti. ... puriso  
sakkattaṃ kareyya, ṭhānam etaṃ vijjatīti pajānāti; ... itthī mārattaṃ kareyya, ... 'ti  
pajānāti. ... puriso mārattaṃ kareyya, ṭhānam etaṃ vijjatīti pajānāti; ... itthī  
brahmattaṃ kareyya, 'ti pajānāti. ... puriso brahmattaṃ kareyya, ṭhānam etaṃ  
vijjatīti pajānāti;  
翻訳は片山（1999）による。
- 23) AK 4.108: bodhisattvaḥ kuto yāvat yato lakṣaṇakarmakṛt | sugatiḥ kulajo 'vyakṣaḥ  
pumān jātismaro 'nivṛt ||
- 24) SP 264.11-13: pañcathānāni sṛy adyāpi na prāpnoti | katamāni pañca | prathamam̐  
brahmasthānam̐ dṛvītyam̐ śakrasthānam̐ ṛṭṭiyam̐ mahārājasthānam̐ caturtham̐  
cakravartisthānam̐ pañcamam̐ avavartikabodhisattvasthānam̐ ||
- 25) AKBh on AK 83c: paramāyus tiraścām antarakalpaṃ tat punar nāgānām̐  
nandopanandāśvatalīprabhṛtīnām̐ |
- 26) SP 262.12-263.8: mañjuśrīr āha | asti kulaputra sāgarasya nāgarājño duhitāṣṭavarṣā



法華經提婆達多品「变成男子」の菩薩觀（白）

jātyā mahāprajñā tikṣṇendriyā jñānapūrvamgamena kāyavānmanaskarmaṇā  
samanvāgatā sarvatathāgatabhāṣitavyañjanārthodgrahaṇe dhāraṇīpratīlabdhā sarv  
adharmasattvasamādhisahasraikakṣaṇapratīlabhīni | bodhicittāvinivartīni  
vistīrṇapranidhānā sarvasattveṣv ātmāpremanūgatā guṇotpādane ca samarthā na  
ca tebhyaḥ parihīyate | smitamukhī paramayā śubhavarṇapuṣkaratayā  
samanvāgatā maitracittā karuṇā ca vācaṃ bhāṣate | sā samyaksambodhim  
abhisamboddhum samarthā |

- 27) SP 224.1-7: bhaiṣajyarāja asyām parṣadi bahudevanāgayaḥkṣaṇagandharvāsurasagaruḍak  
innaramahoragamanuṣyāmanuṣyān bhikṣubhikṣuṇyupāsakopāsikāḥ  
śrāvakayāniyān pratyekabuddhayāniyān bodhisattvayāniyāṃś ca, yair ayaṃ  
dharmaparyāyas tathāgatasya sammukhaṃ śrutaḥ | āha | paśyāmi bhagavan,  
paśyāmi sugata | bhagavān āha | sarve khalv ete bhaiṣajyarāja bodhisattvā  
mahāsattvāḥ, yair asyām parṣadi antaśaḥ ekāpi gāthā śrūtā ekapadam api śrutam  
yair vā punar antaśa ekacittotpādenāpy anumoditam idaṃ sūtram | sarvā etā  
ahaṃ bhaiṣajyarāja catasraḥ parṣado vyākaroṃy anuttarāyāṃ samyaksambodhau |  
28) SP 262.10-263.3: prajñākūṭa āha | idaṃ sūtram gambhīraṃ sūkṣmaṃ durdṛṣam na  
cānena sutreṇa kiṃcid anyat sūtram samam asti | asti kaścit sattvo ya idaṃ  
sūtraratnaṃ satkuryād avabodddhumanuttarāṃ samyaksambodhim  
abhisamboddhum | mañjuśrīr āha | asti kulaputra sāgarasya nāgarājño duhitā ... |

〈略号〉

- AK Abhidharmakośa (Vasubandhu): See AKBh.  
AKBh Abhidharmakośabhaṣya. P. Pradhan ed., *Abhidharmakośabhāṣyam of  
Vasubandhu*, Tibetan Sanskrit Works Series Vol. VIII. Patna: K. P. Jayaswal  
Research Institute. 1975.  
DhP Dhātupāṭha. S. M. Katre ed., *Pāṇinian Studies I* (Deccan College Building  
Centenary and Silver Jubilee Series 52). Poona: Deccan College Postgraduate  
and Research Institute. 1967.  
D Dam pa'i chos pad ma dkar po'i mdo: bka' 'gyur. sDe dge ed., *mdo sde*, ca. Tohoku  
no. 113.  
MN Majjhimanikāya. V. Trenckner ed., *The Majjhima-Nikāya*. Vol. 1. London: Pali  
Text Society, 1888. Repr. London: Pali Text Society, 1964.  
P Dam pa'i chos pad ma dkar po'i mdo: bka' 'gyur. Peking ed., *mdo sna tshogs*, chu.  
Otani no. 781.  
S Dam pa'i chos pad ma dkar po'i mdo: bka' 'gyur. sTog pho brang ed., *mdo sde*,  
ma. Skorupski no. 141.  
SP Saddharmapuṇḍarīka. Hendrik Kern and Bunyiu Nanjio eds., *Saddharmapuṇḍarīka*.

法華經提婆達多品「变成男子」の菩薩觀（白）

Bibliotheca Buddhica 10. St. Pétersbourg, 1908-1912.

TH HIROFUMI TODA (ed.): Saddharmapuṇḍarikasūtra: Central Asian manuscripts. Romanized text. lxi, 365pp, Tokushima: Kyoiku Shuppan Center, 1981.

〈参考文献〉

植木雅俊訳 2008『法華經：梵漢和対照・現代語訳 下』岩波書店, 32.

片山一良訳 2001『パリー仏典①-5 中部（マジマニカーヤ）後分五十経篇 I』大蔵出版, 266-267.

坂本幸男・岩本裕訳注 1964『法華經 中』岩波書店, 225.

島地大等 1914『妙法蓮華經：漢和対照』明治書院, 346.

昭和新纂國譯大藏經編輯部編 1932『昭和新纂國譯大藏經 宗典部 第十二卷 妙法蓮華經文句』東方書院, 530.

戸田裕久 2013「法華經提婆達多品龍女成佛譚の一解釈」伊藤瑞叡博士古稀記念論文集刊行会編集『伊藤瑞叡博士古稀記念論文集：法華仏教と関係諸文化の研究』山喜房佛書林, 133-156.

比叡山専修院附属叡山學院編 1926『傳教大師全集 第三』比叡山圖書刊行所, 264.

平川彰 1983「大乘仏教における法華經の位置」平川彰・梶山雄一・高崎直道編集『講座・大乘仏教4 法華思想』春秋社, 1-45.

松濤誠廉・丹治昭義・桂紹隆訳 1976『法華經 II』中央公論社, 51.

望月海淑 1998「法華經における女人成仏に就いて」『東洋文化研究所所報』2: 5-18.

Kern, Hendrik. 1884 *The Sutra of the Lotus Flower of the Wonderful Law*. Repr. New York: Dover, 1963.

〈キーワード〉 变成男子、龍女、法華經、提婆達多品、菩薩觀